

WGメンバー以外の委員からの水需要管理WGに関する意見
(2002年10月1日～10月21日)

10/3	原田委員(淀川部会)	2
10/10	村上委員(琵琶湖部会、水位管理WG、一般意見聴取WG)	3

大川等の河川維持用水も聖域にするべきではない。

第4回の結果概要を拝見しますと、河川維持流量についての金屋敷氏の発言に対し、リーダーが、「委員会には無駄だと思っている人はいない」と答えられたというようにとれる記述があります。他の委員はどうかわかりませんが、少なくとも私は、淀川最下流の大川等の河川維持流量については、無駄とはきめつけないものの、再評価の必要があるのではないかと考えています。

その理由は、この維持流量を少し減らすことにより、利水面でのダム必要性を減じたり、琵琶湖の負担を減じたりできる可能性があるのではないかと考えるからです。もちろん、大川等の維持流量の減量は、水質面での問題を生じさせるかもしれませんが、この点について、ちゃんとした定量的議論をみせていただいたことはありません。また、減量によって生じる可能性のあるメリットとの相対評価はなされていないと思います。たとえば、大川の水質が少し悪くなることを許容するだけで、丹生ダムが不要になるというようなことはありえないのでしょうか？河川整備計画の策定においては、少なくとも減量によって生じるメリットと、デメリットをちゃんと検討すべきであると考えます。検討の結果、メリットがデメリットを上回ることがないと示される可能性は高いのかもしれませんが、なにも検討しないで、当然のように動くのは間違いであろうと思います。

淀川流域委員会庶務御中

| 村上 悟

前回の琵琶湖部会で、各WGへ意見を出すよう指示がございましたので、水需要管理WGについて、以下の意見をWGの方々にお届けいただきますようお願いいたします。

水需要管理WGの皆様へ

9月10日づけのとりまとめ骨子（案）を読ませていただきました。

これまでの、「需要」を所与の条件として開発を進める発想から、「需要」そのものをコントロールする方向への転換を迫るとりまとめに、賛意を表します。

ただ、現在の提案では権力による「管理」が主たる内容になっており、広報や教育、小規模な水源の再開発等を通じたManagementとしての「管理」についてあまり語られていない印象を受けました。実効性ある水需要の抑制をすすめる上では、一般層にどのような役割を求め、どういう働きかけを河川管理者（やNPO等）がしていくかが大変に重要であり、その点についての議論を深めていただきたいと思います。

具体的には、（1）利水主体となる住民の関わりが「水需要管理協議会」への参加という点でしか語られていない（2）同協議会の目的や機能が具体的に示されていない点が問題であると思います。

すでに一部で動き出している雨水利用の取り組みや、身近な水源の再開発などを積極的に促進するために、河川管理者ができることはあるのではないのでしょうか。また、それらが、危機管理上の安全度を上げることなどの利水者のメリットも併せて強調することにより、単に水資源の犠牲になる環境を守るというお題目だけにとどまらない水資源開発のあり方をデザインすることになると思います（このあたりはシンポジウムで遙洋子氏が強調していた点と思います）。